

## 人生の勲章

[聖書]創世記 23章1～20節

サラの生涯は百二十七年であった。これがサラの生きた年数である。サラは、カナン地方のキルヤト・アルバ、すなわちヘブロンで死んだ。アブラハムは、サラのために胸を打ち、嘆き悲しんだ。アブラハムは遺体の傍らから立ち上がり、ヘトの人々に頼んだ。「わたしは、あなたがたのところに一時滞在する寄留者ですが、あなたがたが所有する墓地を譲ってくださいますか。亡くなった妻を葬ってやりたいのです。」ヘトの人々はアブラハムに答えた。「どうか、御主人、お聞きください。あなたは、わたしどもの中で神に選ばれた方です。どうぞ、わたしどもの最も良い墓地を選んで、亡くなられた方を葬ってください。わたしどもの中には墓地の提供を拒んで、亡くなられた方を葬らせない者など、一人もいません。」アブラハムは改めて国の民であるヘトの人々に挨拶をし、頼んだ。「もし、亡くなった妻を葬ることをお許しいただけるなら、ぜひ、わたしの願いを聞いてください。ツォハルの子、エフロンにお願いして、あの方の畑の端にあるマクペラの洞穴を譲っていただきたいのです。十分な銀をお支払いしますから、皆様方の間に墓地を所有させてください。」エフロンはそのとき、ヘトの人々の間に座っていた。ヘトの人エフロンは、町の門の広場に集まって来たすべてのヘトの人々が聞いているところで、アブラハムに答えた。「どうか、御主人、お聞きください。あの畑は差し上げます。あそこにある洞穴も差し上げます。わたし一族が立ち会っているところで、あなたに差し上げますから、早速、亡くなられた方を葬ってください。」アブラハムは国の民の前で挨拶をし、国の民の聞いているところで、エフロンに頼んだ。「わたしの願いを聞き入れてくださるなら、どうか、畑の代金を払わせてください。どうぞ、受け取ってください。そうすれば、亡くなった妻をあそこに葬ってやれます。」エフロンはアブラハムに答えた。「どうか、御主人、お聞きください。あの土地は銀四百シェケルのものです。それがあなたとわたしの間で、どれほどのことでしょうか。早速亡くなられた方を葬ってください。」アブラハムはこのエフロンの言葉を聞き入れ、エフロンがヘトの人々が聞いているところと言った値段、銀四百シェケルを商人の通用銀の重さで量り、エフロンに渡した。こうして、マムレの前のマクペラにあるエフロンの畑は、土地とそこの洞穴と、その周囲の境界内に生えている木を含め、町の門の広場に来ていたすべてのヘトの人々の立ち会いのもとに、アブラハムの所有となった。その後アブラハムは、カナン地方のヘブロンにあるマムレの前のマクペラの畑の洞穴に妻のサラを葬った。その畑とそこの洞穴は、こうして、ヘトの人々からアブラハムが買い取り、墓地として所有することになった。

### [序] 報告

おはようございます。今日は茗荷谷教会の壮年会音楽奉仕グループの皆さんが暑い最中に遠路はるばる川越までお出でになり、讚美と証の奉仕をして下さいました。有難うございました。私たちの教会からも奉仕に出かけて行けるようになりたいものですね。

先週はA兄弟が宣教の奉仕をして下さいました。感謝します。私は2日の12時から4時まで中野教会でシンガポールから東京近辺に帰ってきて居る教会メンバーの同窓会「シンガポール会」に出席し、羽田に直行して北海道の室蘭に夜11時過ぎに到着。3日は室蘭教会の礼拝で奉仕しま

した。新潟栄光教会の牧師だった斉藤隆先生を、2年前室蘭にご紹介しましたので、どうなさって居られるか案じていました。ご夫妻とも教会に感謝して、明るく喜んで働いておられました。礼拝出席も20名を超えるようになり川越教会によく似ていました。

夜旭川に移動し、4日5日はバスで1時間北の剣淵という人口3000人の町の温泉で、小学校のクラス会に出席しました。私は6年生の時肺結核にかかり1年休学し、東京から疎開しました。そして昭和20年4月に6年生として剣淵国民学校に転入学し、8月15日に戦争が終わったので、翌年2月末卒業式にも出ないで東京へ戻りました。わずか11ヶ月の交わりでなじみも薄い友人たちです。しかも62年ぶりの再会でしたが暖かく歓迎してくれました。

クラス会は皆が45歳になった8月に第1回を開き35名出席、以来30年間に16回集ってきたそうですが、年々出席者が減り、今回は22名。既に亡くなられた方が18名もいるそうです。でも出席者は私同様に元気でした。今北海道ではパークゴルフが盛んで、Iホール40メートルから100メートルのパー3から5のコースを野球のボールよりふた回りほど小さいプラスチックの球を小型のゴルフクラブで叩いて、歩き廻ります。それを夕食前に2時間させられ、翌朝も4時半に起きて、2時間つき合わされました。田舎の老人は元気ですね。

5日は旭川に帰って来て1時間昼寝した後、午後2時から10時過ぎまで旭川教会の方たちのご相談にあずかりました。そして6日の11時の飛行機で帰って参りました。日曜の礼拝と信徒会をお守りくださり、また私のためにもお祈り下さって有難うございました。来週は福岡新生教会の世界宣教日バイバル聖会の奉仕でまた出張します。B姉とC兄に証の奉仕をしていただきます。どうぞ宜しくお願いします。

## [1]子供をめぐるサラの試練

さて今日はアブラハムについての学びの最終回です。苦勞を共にしてきた彼の妻サラが127年の生涯をとじたときのことから学びます。アブラハムは75才にもなってから、神さまに召し出されて、新しい人生を歩み始めました。「あなたは生まれ故郷、父の家を離れて、わたしが示す地に行きなさい」。彼は目的地を明確に示されないままに、老いた父をハランに残し、10才年下の妻サラいと、甥ロトを連れて、出立しました。

今回私が出席した小学校のクラス会は、45才になって第1回を開き、30年間16回続けてきましたが、75才になったので全員に通知を出すクラス会はもうやめようということになりました。幹事役が大変なのですね。ところがアブラハムは75才になってから見ず知らずの遠い地に出て行って、全く新しい人生を始めたのでした。すごいと思います。どうしたことでしょうか？

それは神さまが、彼を祝福の源としてお用いになりながら、地上の全ての氏族を祝福に入れようという計画をお立てになったからでした。人生をどう送るか。自分の安楽だけを考えていてそれではいいのか。人という字は互いに支えあって立っています。人を支えて共に立つ時に、初めて人になる

のですから、やはり人のためにという人生を選び取るべきなのです。他の人々が幸せになるために、先ず自分を神さまの御用に献げる——アブラハムは75才にして、遂にその決断をしたのでした。その時サラは65才。夫に従いました。

彼女についての最初の記述は「サライは不妊の女で子供ができなかった」(創世記11:30)で、これが彼女の信仰の生涯を見ていく鍵になる言葉です。その彼女が、新しい人生を歩み始めた夫に従ってハランを出立しました。約束の地カナンに移住し、それなりに生活も確立したのに、一向に子供を授かりません。空の星のように子孫が与えられるとの約束はどうなったのでしょうか。

75才になりました。遂に自分の召使ハガルをアブラハムの側女にして、イシマエルを得ました。しかしそれは神さまの御心ではありませんでした。神さまはそれから15年後、彼女が90才になって、やっと待望の息子イサク(笑い)を出産させ、「諸国民の母とする」という約束を成就なさいました。「神はわたしに笑い(イサク)をお与えになった。聞く者は皆、わたしと笑いを共にしてくれるでしょう」(21:6)。彼女の喜びの歌です。どんなに嬉しかったことでしょう。

老年の子ながらイサクが丈夫に育ってきたのを見て、彼女は安心したのでしょうか。イサクの将来の禍根を絶とうと、イシマエルとハガルの母子を砂漠に追い出してしまいました。アブラハムとサラが一粒種可愛さにのめり込んでいった様子がかがわれます。すると神さまは彼らから掌中の珠を取り上げようとなさいました。それが先週のメッセージでした。

「あなたの愛する独り子イサクを、焼き尽くす献げ物としてささげなさい」。イサクをわたしにそっくり全部献げよ、何故ならば、この子は多くの民族に祝福をもたらす源として、お前たちに養育を託したわたしの子なのだというご命令でした。イサクを自分たちのものにしてはいけないということ、サラは100才にして痛切に思い知らされたのです。それから27年、立派に成人したイサクを見て、サラは安らかに生涯を閉じました。アブラハムは胸を打ち泣き叫んで、サラの死を嘆きました。

## [2] 墓地の取得

やがてアブラハムは遺体の傍らから立ち上がり、彼女のために墓地を購入しようと地元の人に交渉します。「わたしは、あなたがたのところへ一時滞在する寄留者ですが、あなたがたが所有する墓地を譲ってくださいませんか。亡くなった妻を葬ってやりたいのです」。一時滞在する寄留者とは、土地を所有していないよそ者という意味です。この時アブラハムは137才、カナン地方に移住してきて既に62年も経っているのです。地元の人々からは一目も二目も置かれる実力者になっていたのに、依然として土地を所有していないよそ者にしか過ぎなかったのです。

へつの人々はアブラハムに答えて言いました。「どうか、御主人、お聞きください。あなたは、わたしどもの中で神に選ばれた方です。どうぞ、わたしどもの最も良い墓地を選んで、亡くなられた方を葬ってください。わたしどもの中には墓地の提供を拒んで、亡くなられた方を葬らせない者など、一人もいません」。あなたは神に選ばれた方ですから、最良の墓地を選んで、奥さんを葬ってくださ

いは、アブラハムに対する彼らの好意がよく表されています。

しかしアブラハムは墓地を譲って下さいと申し出たのに、答えは墓地の使用を認めるというものでした。アブラハムはあらためてエフロンの畑の端の洞穴を墓地として売って欲しいと申し出ました。こうしておもだった人々の集る町の広場で、土地の売買交渉が行われました。相手の言値は400シェケルで、これは随分高い値段なのだそうです。しかしアブラハムはあっさり聞き入れて、買い取りました。このやりとりの記述を読むと、よそ者が土地を所有するようになる事が、如何に地元の社会にとって重大事だったかがうかがわれます。

恐らく墓地にするからというので、人々は認めてくれたのでしょう。アブラハムも法外な値段でも、これがカナンの地に子孫が定着していく第一歩だと先を見通して、買い取ったのでしょう。事実、サラに続いてアブラハムも、二代目のイサク夫婦も、そして三代目のヤコブ夫婦も、やがてこの墓地に葬られるようになったのでした。ですからヘト人の地にアブラハムが墓地を取得したということは、全世界に神さまの救いが及んでいくというご計画が展開していく上で、実に大事な出来事だったと言えます。サラはその死に於いても、カナンの地に土地を得て定着し、神さまの御心を実現させていく夫アブラハムの役割を、見事に助けたのでした。

先週の祈祷会の学びの時に、D兄弟が「どうぞ、私どもの最も良い墓地を選んで、亡くなられた方を葬ってください」というヘト人の言葉に注目して、これはサラの生活ぶりが言わせた言葉ではないかと言いました。サラの晩年の生活をよく知る地元の人々が、あのような生涯を送ったお方は、最良の墓地に葬られるべきだと言いつつ合意したのではないかと言うのです。本当にそうですね。アブラハムだけが偉かったのではなくて、その妻であるサラ自身の毎日の暮らし方が、地元の人々の心を打つものだったからに違いありません。

## [結] 人生の勲章

こうしてサラは127年の生涯を閉じました。彼女は「サライは不妊の女で、子供ができなかった」という記述で聖書に登場しました。子供が出来なかったが故に、75才になって、側女に イシマエルを産ませて跡継ぎにしようとした罪を犯してしまいました。90才でやっとイサクを授かりますと今度はイシマエルを追い出す罪を犯しました。彼女の苦勞の根源は子供でした。

でも彼女が亡くなった時に地元の人々は、彼女の生涯を最高に評価したのでした。サラは っまずいて罪を犯しても、信仰を捨てず、成長していったのです。そして人生の終わりに彼女は隣人たちから最高の勲章を贈られたのではないのでしょうか。ですから新約聖書では彼女は神に望みを託した聖なる婦人たちの母とされています(I ペトロ3:5~6)。

アブラハムを見てもサラを見ても、人間いくら年をとっても未熟で愚かで、神さまから叱られることをしでかす者なのですね。でも神さまは彼らを決して見放しませんでした。彼らも神さまから離れませんでした。そして神さまは彼らを用いて、救いの御業を世界に広めて行かれました。私たちもそ

のような信仰の証人の生涯を送っていきたいものです。

完